

受験番号	氏名
------	----

一次のぼう線部の読みをひらがなで書きなさい。

- | | | | |
|--------------|-----|------------|-----|
| ①紙が散乱する。 | () | ②鋼鉄のような肉体。 | () |
| ③縮尺五万分の一の地図。 | () | ④事故で重傷を負う。 | () |
| ⑤集合し、点呼をする。 | () | ⑥うわさを否定する。 | () |
| ⑦せみの幼虫。 | () | ⑧糸を垂らす。 | () |

二次のぼう線部を漢字に直して書きなさい。送り仮名が必要な場合は送り仮名も書くこと。

- | | | | |
|------------|-----|----------------|-----|
| ①オンセンに行く。 | () | ②キチヨウな宝石を見つける。 | () |
| ③つるのオンガエシ。 | () | ④友人とエイガを見る。 | () |
| ⑤ジコクを教える。 | () | ⑥バスからオリル。 | () |
| ⑦生物のシンカ。 | () | ⑧ジユウライ通りのルール。 | () |

三次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ことばというものは、もともとノドの声帯が空気をふるわせて発生した音声の連続ですから、口から発せられた次の瞬間にはもう消滅してしまい、テープレコーダーのような機械でも使わない限り、それを保存することはできません。また人間はどんなに大きな声を出しても、その声が届く範囲にはかならず限界があります。それはメガフォンやマイクロフォンを使っても、やはり同じことです。

①口から発せられることばだけでは、声が届かないほど遠いところにいる人になかを伝えることができません。（A）人類は、文字が発明されるまでの長い間、人と人が直接に顔をあわせる場合、あるいは声が届く範囲内で、さらに発せられた音声をリアルタイムで聞ける場合にしか、お互いのコミュニケーションがとれないという状況にありました。

ここに文字の大きな役割があります。文字とはある特定の言語を書き表すために開発された符号システムであり、これを使うことによって、口から発せられ、瞬間的に消えてしまう音声によることばを、「記録」という形で、目に見えるものに定着することができました。こうして記録されたことばは、その文字に関する約束ごとを知っている人ならば、記録された内容を読むことで、そこに書かれている情報や知識を共有することが可能です。

（B）ありがたいことには、文字が記録された素材はほとんどの場合、それほどかさがることがありません。ビルの壁面や山の岩肌などに記された文章、あるいは大きな石碑というような②ケースでもない限り、記録を遠いところへ運ぶことも困難ではありませんでした。

だからこそ③文字は、人類の文明を伝播させる乗り物として機能することとなったのです。世界の古代文明はほとんどの場合、独自の文字をもっており、それを使って大量の記録を残してきました。

文字は、同時代において空間を飛びこえることができる乗り物であるだけでなく、さらにはそれを④時間軸にそって運行することも可能でした。記録された文字が伝承されれば知識を後世に伝えることができますし、逆に後世の歴史家たちは、古代の遺跡などから発見された文字を読むことによって、過去の時代の詳しい状況を知ることができます。文字こそは、人類の歴史におけるもっとも偉大な発明であつたといつていいでしょう。

人間が話す言語がいったいどれくらいあるのか、その数を正確に計算することは非常に難しいことですが、ある言語学者の統計によれば、これまでに存在した言語は七〇〇種類くらいで、現在の地球上で使われているものだけに限れば、大体三〇〇種類くらいの言語があるとされます（これには異説もたくさんあります）。しかし、これらの言語を表記するための文字となると、その数はぐっと少なくて、だいたい四〇〇種類くらいとされています。

このように文字の種類が言語の数にくらべて十分の一くらいしかないということには、もちろん理由があります。

理由の一つは、「みずからを表記するための文字をもたない言語」があるからです。世界中のどんな言語であれ、「音声のみあつて文字をもたない言語」はあつても、その逆の場合、つまり⑤「文字だけあつて音声をもたない言語」というものは存在しません。文字をもたない言語が使われているところでは、いわゆる「⑥無文字社会」が形成されます。

文字をもたない、あるいは文字を使わない人々や社会について、これまでともすれば「未開で遅れた状態」と考えられてきました。しかしそれは、文字をもっている世界から対岸を眺めた時の、一種の差別と偏見に基づく考え方といわねばなりません。文字をもたない世界には、文字をもっている世界とはまったく質を異にするコミュニケーションの方式があつて、文字は必ずしも「文明的な世界」と「野蛮な状態」を分ける指標とはなりません。

（阿辻哲次「漢字のはなし」より）

＊声帯…声を出すための器官。 リアルタイム…同時。 伝播…広く伝わること。

※問題はその二へ続きます。

$$(\gamma_0, \gamma_1)$$

ア
しかし
イ
さらに
ウ
あるいは
エ
だから
オ
ただし
カ
では

問3 ②「ケース」と同じ意味を表す言葉を、同じ段落中から二字でぬき出しなさい。

る適切な言葉を、文章の中からそれぞれ五字以内でぬき出しなさい。

へ運ぶことができるから。

て三十字以上四十字以内で書きなさい。

[illegible]

らですか。文章中からぬき出しなさい。

⑥「無文字社会」とはどういう社会ですか。解答欄に続く形で、文章中から十六字でぬき出しなさい。

[illegible]

社会。

ら始まりますか。その部分の最初の五字を文章中からぬき出しなさい。

$$\begin{pmatrix} 2 \\ \vdots \\ 1 \end{pmatrix}$$
$$\begin{pmatrix} 3 \\ \vdots \\ 1 \end{pmatrix}$$

事者が文章中で述べていることとして適するものを次から一つ選び、記号に○をつけなさい。

人と人が直接に顔を合わせて情報を伝え合うための方法として、文字は発明された。

文字に関する約束ごとを知らなくても、文字を見るだけで情報を共有することができる。

人間が話す言語の種類を正確に数えることは難しいが、文字の種類は正確に数えられる。

文字をもたない社会が、文字をもっている社会よりも劣っているとは必ずしも言えない。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【アメリカで育ち、リトルリーグでピッチャーをしていた球児。小学六年生のときに日本に帰国して、地元の東陽リトルに入団するが、チームは弱小で、強豪の習志野リトルとの練習試合で大敗してしまう。】

帰り道、球児は一人先にグラウンドを出て、中嶋の投球を思い出していた。長身から投げ下ろすストレートは、球威を落とすことなくキャッチャーまで届いていた。打者の手もとで伸びる速球だということが、ベンチからでも対戦しているかのようにわかった。

おまけに、その速球を生かす変化球。

球児は①奥歯を噛みしめた。

中嶋は速球でバッターを追いかみ、変化球で打ち取っていた。速球に目がなれたところで、変化球でタイミングをずらされる。見事な組み立てだった。

勇平に聞いたところによると、中嶋は習志野リトルに入団するために家族で引っ越したのだそうだ。

なのに自分は登板の機会さえ与えられず、こうしてくすぶっている。球児は情けなさに押しつぶされそうだった。

——東陽リトルは最悪だ、ランディ。ごめん、世界大会なんて無理だ。

②約束は、果たせそうにない。

球児は送信ボタンにカーソルを乗せた。クリックすれば、この叫びがランディに届く。

そのまま一分ほどが過ぎ、球児はマウスのボタンから指を離れた。

＊中嶋：習志野リトルのピッチャー。 勇平：東陽リトルのメンバー。

春子：球児の祖母。 加奈子：球児の母。

問1 ①「奥歯を噛みしめた」とありますが、このときの球児の気持ちとして適当なものを一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 中嶋の投球に感動し、あなりたいとあこがれている気持ち。 イ 自分の投球に自信をもっている気持ち。

ウ 中嶋との差を感じ、悔しさやあせりを感じている気持ち。 エ 試合に勝てたことに安心している気持ち。

問2 ②「約束」とはどういう約束ですか。「世界大会」という言葉を使って、簡潔に書きなさい。

問3 ③「羽の部分でつながっていた」とありますが、この連鶴の様子が表していることがらとして適切なものを次から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 球児と春子が強いきずなで結ばれていること。 イ 野球を愛する心はアメリカでも日本でも変わらないこと。 ウ おじいちゃんが球児の試合を見守っていること。 エ 野球は一人でするものではなく、チームプレーであること。

問4 (A)にあてはまる言葉として適切なものを次から一つ選び、記号に○をつけなさい。

ア 不思議そうに イ おそろしそうに ウ 迷惑そうに エ うれしそうに

問5 ④「決意の気持ち」とありますが、その気持ちが具体的に書かれている部分を文章中から十四字でぬき出なさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※問題その四はその二の裏にあります

頭を抱えて机に突伏す。

どれほどそうしていただろうか。部屋の扉がノックされた。

「球児、ちよつといい？」

春子の声だった。ノートパソコンを閉じて、「いいよ」と答える。

静かに入ってきた春子は、後ろ手に持っていた紙細工を球児の前に掲げた。

「いいでしょう、これ」

それが折り紙の「鶴」だということは、球児も知っていた。加奈子から教えてもらって折ったこともある。

今、パソコンの上に置かれたのは「鶴」が二羽。③羽の部分でつながっていた。

「連鶴っていうんだよ」

(A)手に取った球児に春子が続けた。

「手に手をとって羽ばたいていくって、野球も同じだろ。試合前になると、おじいちゃんは必ずこれを折っていたからね。球児にもお守り代わりに、と思って」

「うん、サンキュー、おばあちゃん」

春子は笑顔を残して、球児の部屋から出ていった。

連鶴を机において、メールの画面を開く。

——東陽リトルの実力はひどいものだ。
でも、なんとかやってみるよ！

さつきは押せなかった送信ボタンを、球児は④決意の気持ちをこめてクリックした。(鬼塚 忠「僕たちのプレイボール」より)

ランディ：球児がアメリカで入っていたチームのキャッチャー。

五 あなたが小学校で「がんばったこと」「か感動したこと」について自由に書きなさい。

- ・「がんばったこと」「か感動したこと」のどちらかを選んで書くこと。
- ・題名、名前は書かず、一行目から本文を書き出すこと。
- ・正しい原稿用紙の使い方を書くこと。
- ・六行以上書くこと。

テーマを選び、○をつけなさい。

「がんばったこと」 「感動したこと」

10

20